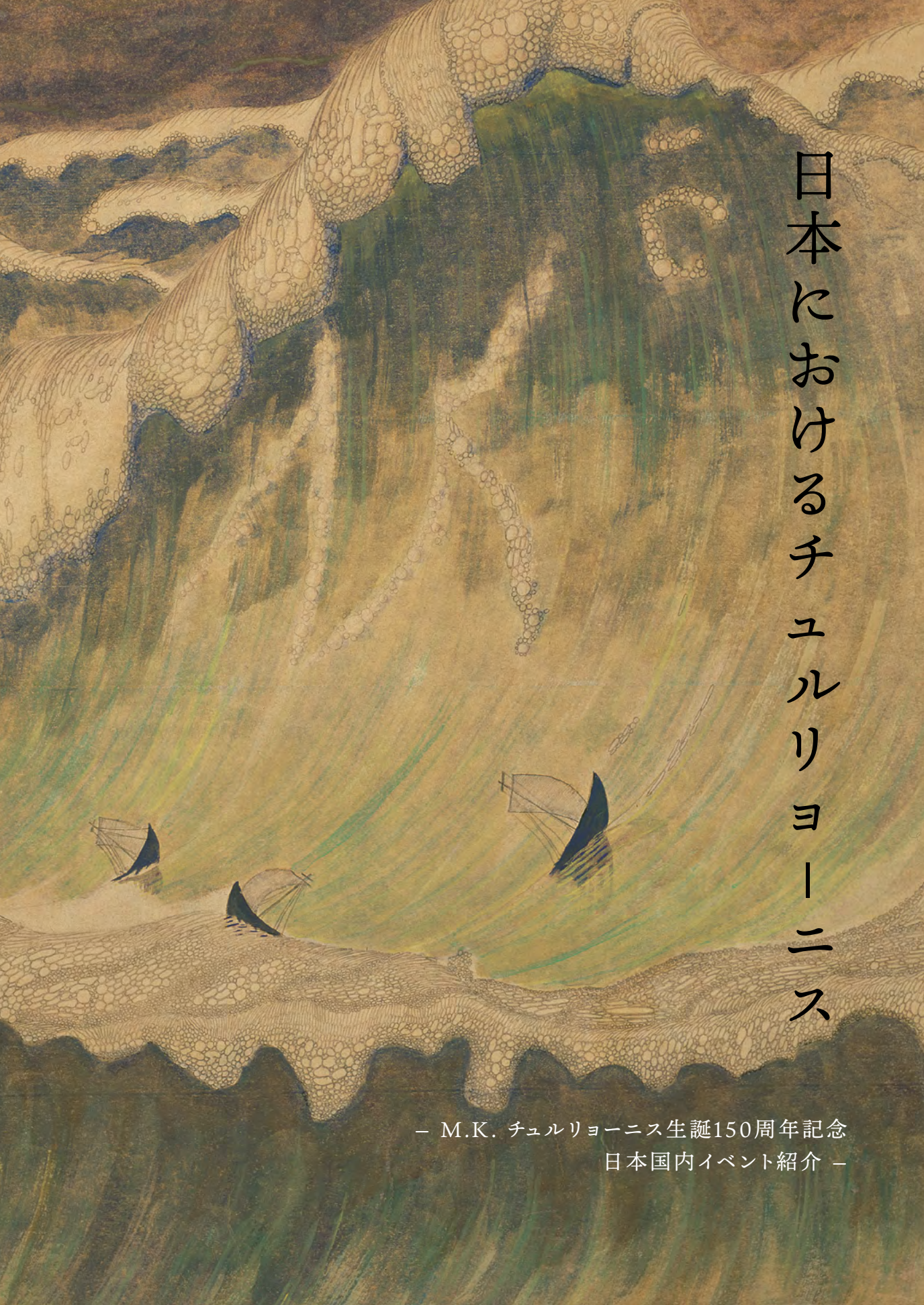




日本における チュルリョーニス

— M.K. チュルリョーニス生誕150周年記念
日本国内イベント紹介 —

「日本におけるチュルリョーニス」

編集：布川由美子

翻訳・校正：ジェイミ・ハンフリーズ

デザイン：ユルガ・ジェルヴィテ

企画：ガビヤ・チェプリョニーテ駐日リトアニア共和国大使館 文化担当官

発行：リトアニア・カルチャー・インスティテュート（2026年）





「日本におけるチュルリョーニス」

— M.K.チュルリョーニス 生誕150周年記念 日本国内イベント紹介 —

ミカロユス・コンスタンティナス・チュルリョーニス(1875-1911)は、作曲家であり画家でもあったリトアニアを代表する芸術家です。

わずか35年にも満たない生涯でしたが、音楽と絵画を並行して制作し、独自の宇宙観をもつ象徴主義的な作品群を残しました。

2025年から2026年にかけては、生誕150周年の記念年にあたり、日本国内では展覧会、演奏会、講演、オンライン企画など、多彩な関連イベントが開催されます。

本冊子では、「日本におけるチュルリョーニス」と題し、駐日リトアニア大使館文化部およびリトアニア・カルチャー・インスティテュートが、日本とリトアニアの各パートナー機関協力のもと展開し、2026年に日本で行われるイベントプログラムをご紹介します。

—目次—

オンラインレクチャー

「チュルリョーニスの創造的肖像画における七つの側面」

講師：ロカス・ズボヴァス

2026年2月21日(土)19:00

演奏会 東京・春・祭ディスカヴァリー・シリーズ vol.12

ミカロユス・コンスタンティナス・チュルリョーニス

指揮：セルゲイ・クリロフ

管弦楽：リトアニア室内管弦楽団

2026年3月26日(木)19:00

会場：東京文化会館 小ホール

展覧会

「チュルリョーニス展 内なる星図」

2026年3月28日(土)～6月14日(日)

会場：国立西洋美術館

展覧会開催記念特別講演会 「継承から革新へ：国立M. K. チュルリョーニス美術館の歩み」

講師：ヴィルギニア・ヴィトキエネ（国立M. K. チュルリョーニス美術館 館長）

2026年3月28日(土)14:00-15:30

会場：国立西洋美術館 講堂

東京・春・音楽祭

「チュルリョーニス展 内なる星図」
記念コンサート

ヨアナ・ダウニーテ(ハープ)

演奏会 2026年4月3日(金)11:00

会場：東京文化会館 大ホールホワイエ

展覧会関連スライドトーク

解説：朝倉南(国立西洋美術館研究員)

2026年4月3日(金)17:30-18:00

会場：国立西洋美術館 講堂

演奏会 「チュルリョーニスとその同時代人—フランスの作曲家たち」

ヨアナ・ダウニーテ=& 上田智子(ハープ)

2026年4月4日(土)14:00

会場：静明寺(石川県金沢市)

演奏会 東京・春・音楽祭

「チュルリョーニス展 内なる星図」
記念コンサート

出演：デュオ ズボヴァス

ピアノ：ロカス・ズボヴァス／ソナタ・デヴェイキエ
テ＝ズボヴィエネ

2026年4月16日(木)2回公演(11:00／14:00)

会場：国立西洋美術館 講堂

レクチャーコンサート「チュルリョーニス：サウンドスケープを追って」

ロカス・ズボヴァス&ソナタ・デヴェイキエ
テ＝ズボヴィエネ

2026年4月20日(月)18:00

会場：桐朋学園音楽大学 音楽学部

調布キャンパス



静寂1904/1905 パステル、(木炭?)、紙 54 x 74 cm

演奏会「チュルリョーニスー光と無限」
～リトアニアと日本の作曲家の作品～
ロカス・ズボヴァス、末永匡、谷口智聡
(ピアノ)

2026年4月22日(水)19:00

会場:サントリーホールブルーローズ(小ホール)

展覧会関連スライドトーク

解説:朝倉南(国立西洋美術館研究員)

2026年4月30日(木)11:00-11:30

会場:国立西洋美術館 講堂

展覧会関連オンライン講演会

タイトル:「ミカロユス・コンスタンティナス・
チュルリョーニス(1875-1911):紙上に
広がる幻想世界」

講師:ヴァイヴァ・ラウカイティエネ
(国立M. K. チュルリョーニス美術館学
芸員)

2026年5月16日(土) 11:00-12:30

実施方法:Zoomウェビナーにて配信

※事前申込制

展覧会関連スライドトーク(手話通訳付き)

解説:朝倉南(国立西洋美術館研究員)

2026年6月2日(火)10:00-10:30

会場:国立西洋美術館 講堂

演奏会 現代音楽アンサンブル<Synaesthe-

sis> — Čiurlionis. Slowed and Reverb —

2026年6月9日(火)19:00開演

会場:東京カテドラル聖マリア大聖堂
(カトリック関口教会)

演奏会現代音楽アンサンブル<Synaes-

thesis> — Čiurlionis. Slowed and Reverb —

2026年6月13日(土)16:00開演

会場:東本願寺 能舞台(京都)



友情 1906/1907 パステル、紙 73.4 x 63.5 cm

日本の団体によるイベント

在本彌生写真展

「水は宙を視ている — チュルリョーニスの
仕業 —」

2026年3月20日(金)～5月6日(水)

会場:minä perhonen elävä II

演奏会

マーラー祝祭オーケストラ

第26回定期演奏会

2026年4月11日(土)13:30

会場:ミューザ川崎シンフォニーホール

VR体験イベント:「天使の軌跡

(Trail of Angels)」金沢ナイトミュージ
アム参加企画

2026年8月14日(金)／15日(土)／16日
(日)(仮)

2026年8月21日(金)／22日(土)／23日
(日)(仮)

2026年8月28日(金)／29日(土)／30日
(日)(仮)

各回:11:00、12:00、13:00、14:00、

15:00、16:00、17:00、18:00、19:00、20:00

場所:ギャラリー ノエチカ

(石川県金沢市下本多町6-40-1)

ミカロユス・コンスタンティナス・ チュルリョーニスとは

2025年から2026年にかけて、リトアニアの文化史において特別な位置を占める芸術家、ミカロユス・コンスタンティナス・チュルリョーニス(1875-1911)は生誕150周年を迎えます。チュルリョーニスは、作曲家であり画家でもあった稀有な存在として、リトアニアの近代文化を象徴する国民的芸術家です。

音楽と絵画の双方に卓越した才能を発揮した彼は、分野の枠を越えた創作活動を通して、独自の芸術世界を築きました。その作品はリトアニア近代文化の礎を形づくっただけでなく、同時代の芸術動向を先取りする先見性を備え、ヨーロッパ美術史・音楽史の中でも他に類を見ない存在として評価されています。

教会オルガニストの家庭に生まれ、九人兄弟の長男として育ったチュルリョーニスは、幼少期から神童として知られていました。五歳でピアノを、六歳でオルガンを演奏し始め、ワルシャワ音楽院およびライプツィヒ音楽院で音楽を学びます。その後、絵画への関心を深め、ワルシャワ美術学校に進学しました。

わずか35年という短い生涯のなかで、彼は約200の楽曲と300点に及ぶ美術作品を残しています。1910年には心身の不調から療養所に入所し、翌1911年、肺炎のため若くしてその生涯を閉じました。

音楽の分野では、リトアニア初期の近代音楽を切り拓く存在として、交響詩《森の中で》および《海》を作曲しました。加えて、弦楽四重奏曲、後年「プレリュード」と総称されることになる多数のピアノ小品、さらにはリトアニア民謡を素材とした合唱曲用の編曲作品など、多様なジャンルにわたる作品を残しています。

一方、絵画においては、「絵画ソナタ」「前奏曲」「フーガ」など、音楽的構造を視覚芸術に取り入れた独自の形式を生み出しました。音楽と絵画を融合させたこれらの作品によって、チュルリョーニスは象徴主義と抽象表現の狭間に位置づけられ、共感覚的芸術の先駆者としても注目されています。

彼の芸術を特徴づけているのは、神話や宗教的モチーフを、文化や時代を超えて結びつける独自の視覚言語です。神智学、宇宙論、哲学、古代東洋文化への深い関心は、作品に高い精神性と普遍性を与えました。異教文化からキリスト教へと改宗した最後の国の一つであるリトアニアの歴史的背景も、彼の芸術的想像力の重要な土壌となっています。

また、チュルリョーニスは祖国リトアニアの自然に深く根ざした画家でもありました。彼の作品には、自然への敬意と畏敬の念が静かな牧歌的哀愁として表現され、リトアニアの精神文化の本質が映し出されています。彼の芸術に触れることは、リトアニアという文化の核心に触れる体験でもあります。

数千年にわたる象徴や原型を内包するチュルリョーニスの芸術は、今日においても精神性を求める人々の心に強く響きます。天体や宇宙との関係をめぐる彼の思索のなかで、世界は混沌ではなく、人間、自然、そして目に見えない領域が調和的につながる全体として捉えられていました。生誕150周年という節目は、その先見性と芸術の本質をあらためて見つめ直す貴重な機会となるでしょう。

オンラインレクチャー「チュルリョーニスの創造的肖像画における七つの側面」

2026年2月21日(土)19:00-21:00

本講演では、作曲家であり画家でもあったチュルリョーニスの芸術世界に焦点を当て、絵画と音楽を横断する独自の創作思想とその魅力を、七つの視点から解説します。

講師は、チュルリョーニスの曾孫にあたり、長年その作品研究と演奏に取り組んできたピアニスト、ロカス・ズボヴァス氏。Zoomによるライブ配信でお届けします(通訳あり)。

講師紹介

ロカス・ズボヴァス – ピアニスト、文化イベントおよび音楽祭の企画者、ミカロユス・コンスタンティナス・チュルリョーニスの曾孫。

リトアニア音楽アカデミーで学び、アメリカ・シカゴのデポール大学にて修士号を取得。チューリッヒのヘンリク・ネイハウス研究所ではピアニストのエステル・エリナイテに、クリーブランドではピアニストのアンドリウス・クプレヴィチウスに、ブルーミントンではピアニストのエドワード・アウアーに師事した。1994年から2000年まで、シカゴのセント・ザビエル大学音楽学部にて教鞭を執った。

演奏活動およびその他の文化的活動において、ズボヴァスはチュルリョーニスの創作遺産の普及に特別な関心を注いでいる。2014年以降、ヴィリニウスにあるチュルリョーニス記念館の館長を務めるとともに、「チュルリョーニスとともに過ごすドルスキニンカイの夏」音楽祭の主催者であり、また「国立チュルリョーニス・ルート」構想の発起人の一人でもある。

2005年には、ズボヴァスによる録音で、チュルリョーニス作品のCD『チュルリョーニス：ピアノ作品集 1896-1899年』がリリースされた。その後、ドイツのピアニスト、ニコラウス・ラフゼン(1960-2005)が開始した録音事業を引き継ぎ、チュルリョーニスのピアノ作品全曲を録音した。チュルリョーニス没後100年にあたる2011年には、これらの録音が、ズボヴァス自身が執筆した書籍『ミカロユス・コンスタンティナス・チュルリョーニス』とともに出版された。2013年夏には、イギリスの映画監督ロバート・マランによる映画『ソフィアへの手紙』が劇場公開され、ズボヴァスはその中で主役を演じ、著名な曾祖父であるチュルリョーニスを体現した。

日時：2026年2月21日(土)19:00-21:00

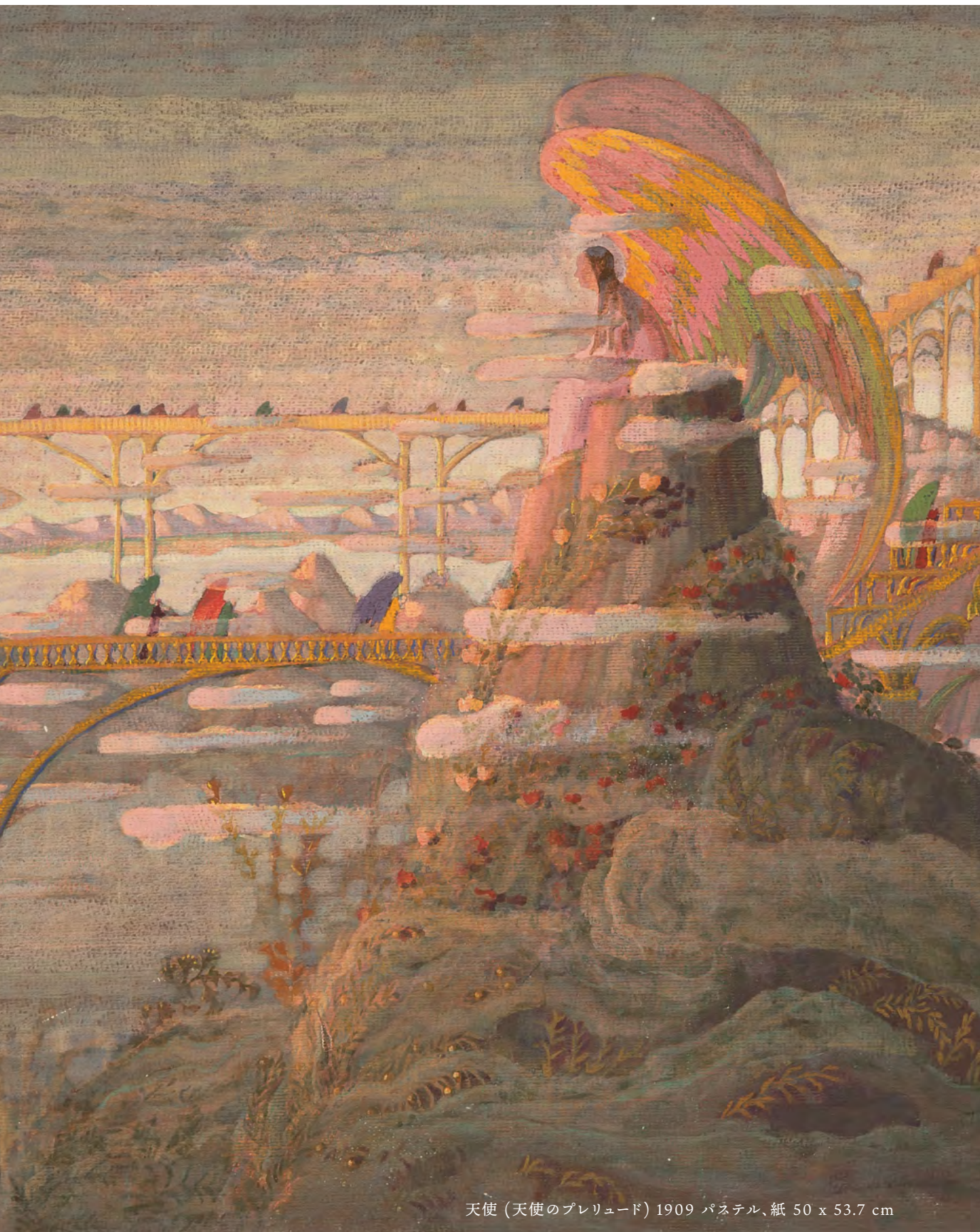
開催方式：Zoomを使ったライブ方式

講師は、リトアニア、ヴィリニウスのチュルリョーニス・ハウスからご講演

<https://www.hokuobunka.org/>

主催：北欧文化協会

共催：駐日リトアニア共和国大使館



天使 (天使のプレリュード) 1909 パステル、紙 50 x 53.7 cm



第四ソナタ（夏のソナタ）スケルツォ 1908 テンペラ、紙 72.5 x 62.1 cm

演奏会東京春祭ディスカヴァリー・シリーズ vol.12

ミカロユス・コンスタンティナス・
チュルリョーニス

リトアニア室内管弦楽団

東京・春・音楽祭(東京・上野)

2026年3月26日(木)19:00開演(18:30開場)

会場:東京文化会館 小ホール

指揮:セルゲイ・クリロフ

管弦楽:リトアニア室内管弦楽団

お話:布川由美子(早稲田大学非常勤講師)

出演者

セルゲイ・クリロフ(指揮)

セルゲイ・クリロフは、現代を代表するヴァイオリニストであり指揮者の一人として、国際的に高い評価を受けている音楽家である。2008年よりリトアニア室内管弦楽団の芸術監督および首席指揮者を務め、これまでに同楽団とともに世界各地で200回以上の公演を行ってきた。

ヴァイオリニストとしては、バロックから21世紀の前衛音楽に至るまで幅広いレパートリーを誇り、世界的なオーケストラや著名な指揮者と共演を重ねている。また指揮者としても、イギリス、イタリア、ドイツ、スイス、イスラエルなど各国のオーケストラを指揮し、高い信頼を得ている。

教育者としても活躍し、スイス・ルガーノ音楽院の教授を務めるほか、国際コンクールの審査員としても頻繁に招聘されている。

録音では、ドイツ・グラモフォン・レーベルからリリースされたヴィヴァルディ《四季》や、パガニーニ《24のカプリース》、ペンデレツキ《ヴァイオリン協奏曲〈変容〉》などが知られる。使用楽器は、日本財団の厚意により貸与されている1710年製アントニオ・ストラディヴァリ《カンポセリーチェ》である。

リトアニア室内管弦楽団

リトアニア室内管弦楽団は、1960年にサウリウス・ソンデツキス教授によって創設された、リトアニアを代表する室内オーケストラである。創設以来、ヨーロッパ全域をはじめ、北米・南米、南アフリカ、オーストラリア、日本、中国、台湾、レバノンなど、世界各地で演奏活動を行ってきた。

ベルリン・フィルハーモニー、ウィーン楽友協会、ロンドンのロイヤル・フェスティバル・ホール、アムステルダム・コンセルトヘボウ、

パリ・サル・プレイエル、ライプツィヒ・ゲヴァントハウスなど、世界有数のホールで演奏を重ね、国際的評価を確立している。

100点を超える録音を残しており、ドイツ・グラモフォンから発売されたヴィヴァルディ《四季》は、その代表的な成果の一つである。古典から現代作品まで幅広いレパートリーを持ち、とりわけリトアニアの作曲家による作品の演奏と録音において、重要な役割を果たしてきた。

布川由美子(お話)

早稲田大学非常勤講師。リトアニア国立カウナス工科大学にて日本人で初めて博士号(PhD)を、ロンドン大学ゴールドスミス校にて修士号(MMus)を取得。

これまでに、セルゲイ・プロコフィエフに関する研究論文を英国の学術誌『Three Oranges Journal』(セルゲイ・プロコフィエフ財団)に発表。2009年には、ヴィータウタス・ランズベルギス教授の研究書の日本語版『チュルリョーニスの時代』(ヤングトゥリープレス)の刊行に協力した。

2011年には、ダリウス・クチンスカス教授編集による《チュルリョーニス:ピアノ作品集(原典版)》(ヤマハミュージックメディア)の楽譜出版に、プロデューサーおよび翻訳者として携わっている。2010年以降、チュルリョーニスを主題とする国際学会に継続的に参加し、研究活動を行ってきた。研究分野は、チュルリョーニス研究、リトアニア民謡、世紀末芸術、ジャポニスムなどに及ぶ。

曲目

M.K.チュルリョーニス(チェピンスキス編):
弦楽四重奏曲 ハ短調

M.K.チュルリョーニス(ソンドツキス編):
5つの前奏曲 (ヴァイオリン:セルゲイ・クリロフ)

V.バルトウリス:わたしはシューベルトが好き

A.マルティナイティス:楽園の鳥たち

Z.マルティナイティエテ:《魂の風景》より「春」

曲目解説

チュルリョーニス(チェピンスキス編):弦
楽四重奏曲 ハ短調

この弦楽四重奏曲は、チュルリョーニスが1901年、ライプツィヒ音楽院でカール・ライネッケに師事していた時期に作曲した作品で、リトアニア音楽史上初の本格的弦楽四重奏曲とされている。初演はライプツィヒ音楽院において行われた。



プレリュード(騎士のプレリュード)1909
テンペラ、紙 58.9 x 70.4 cm

明快な構成、均整のとれた書法、ロマン派的抒情性、そしてリトアニア的牧歌性を感じさせる点に本作の魅力がある。終楽章は散逸しており、現在は三楽章構成で演奏される。

2020年、ヴァイオリニストのヴィルヘルマス・チェピンスキスによって弦楽合奏版が編曲され、原曲の性格を保ちつつ、弦楽オーケストラ作品としての完結性が与えられた。

チュルリョーニス(ソンデツキス編):5つの前奏曲

本作は、チュルリョーニスのピアノおよびオルガンの前奏曲を、リトアニア室内管弦楽団の創設者サウリウス・ソンデツキスが弦楽合奏用に編曲した作品である。

《グラーヴェ》《モデラート》《アンダンテ》《アレグレット》《レント》の5曲からなり、簡潔な形式の中に内省的で詩的な表現が凝縮されている。弦楽器の柔らかな響きが、チュルリョーニスの精神的世界を静かに浮かび上がらせる。

バルトウリス:わたしはシューベルトが好き
ヴィドマンタス・バルトウリスは、現代リトアニアを代表する作曲家の一人である。本作は「I like...」シリーズの一曲として1998年に作曲された。

音楽はほとんど無音に近い状態から始まり、独奏ヴァイオリンが同一音を執拗に反復することで、徐々に緊張感を高めていく。終結部では、シューベルトの弦楽五重奏曲ハ長調第2楽章の旋律が引用され、時間と感情の持続をめぐる深い省察が示される。

マルティナイティス:楽園の鳥たち

アルギルダス・マルティナイティスは、自然や信仰から着想を得る作曲家として知られている。《楽園の鳥たち》は1981年に電気チェロと録音のために作曲され、2016年に弦楽オーケストラ版が作られた。

リズムの動きと音色の多彩さが増し、聴き手を音の喜びへと導く、詩情豊かな作品となっている。

マルティナイティエ:《魂の風景》より「春」

ジブオクレ・マルティナイティエは、ニューヨークを拠点に国際的に活躍する作曲家である。《魂の風景(Sielunmaisema)》は「魂の風景」を意味するフィンランド語から着想を得た作品で、四季を主題としている。

本公演では第2楽章「春」が演奏される。生命力に満ちた音楽でありながら、内省的で深い精神性を湛え、聴き手を意識の深層へと誘う。



第五ソナタ(海のソナタ)アンダンテ 1908
テンペラ、紙 73.1 x 62.2 cm

入場料: 4,000 円/U-25 2,000 円 全席指定
公式ページ

https://www.tokyo-harusai.com/program-info/2026_discovery_ciurlionis/

主催: 東京・春・音楽祭実行委員会

協力・助成: 駐日リトアニア共和国大使館／
リトアニア国立フィルハーモニー協会／リトアニア・カルチャー・インスティテュート

「チュルリョーニス展 内なる星図」

2026年3月28日(土) - 6月14日(日)

会場：国立西洋美術館 企画展示室B2F

(東京都台東区上野公園7-7)

開館時間：

9:30～17:30(毎週金・土曜日は20:00まで)



「天地創造」全13点よりVI, 1905/1906 テンペラ、紙 36.3 x 31.5 cm

本展「チュルリョーニス展 内なる星図」は、リトアニアを代表する芸術家ミカロユス・コンスタンティナス・チュルリョーニス(1875-1911)の創作の全貌に迫る、日本では34年ぶりとなる大規模回顧展である。

作曲家であり画家でもあったチュルリョーニスは、音楽と絵画という二つの芸術領域を横断し、象徴主義的かつ宇宙的な独自の表現世界を築いた。本展では、リトアニア国内に所蔵される貴重な作品を中心に、絵画、素描、関連資料を通して、その芸術の核心を紹介する。

主催は国立西洋美術館、読売新聞社、国立M. K. チュルリョーニス美術館。リトアニア共和国文化省による特別助成のもと、国際的な協力体制によって実現した展覧会である。

本展の見どころ

再評価の機運が高まるリトアニアの国民的芸術家—34年ぶりの大回顧展

近年、ヨーロッパを中心に国際的評価が高まっているチュルリョーニスの芸術を、日本で包括的に紹介する貴重な機会となる。絵画と音楽を統合的に捉える視点から、その創作の全体像が提示される。

日本ではめったに見ることのできない作品がリトアニアから来日

本展では、リトアニアから多数の作品が来日し、日本ではほとんど紹介されてこなかった代表作・重要作を間近で鑑賞することができる。

音楽の構造を絵画に取り入れた、作曲家ならではの造形表現

《絵画ソナタ》《前奏曲》《フーガ》といった音楽用語を冠した連作に見られるように、チュルリョーニスは音楽の構造や時間性を視覚芸術に移植した。本展では、こうした音楽的思考と視覚表現の融合に注目する。

謎に包まれた傑作《レックス(王)》、日本初公開

チュルリョーニス芸術を象徴する作品の一つ《レックス(王)》が、日本で初めて公開される。精神性と象徴性を極限まで高めた本作は、本展最大の見どころの一つである。

入場料：一般 2,200円／大学生 1,300円／高校生 1,000円

チケットは下記サイトよりご購入いただけます。

https://www.e-tix.jp/nmwa_exhibition/

公式特設サイト：

<https://2026ciurlionis.nmwa.go.jp/english/>

主催：国立西洋美術館、読売新聞社、国立M. K. チュルリョーニス美術館

特別助成：リトアニア共和国文化省

助成：国立西洋美術館柴原慶一基金

後援：J-WAVE

協力：駐日リトアニア共和国大使館、西洋美術振興財団

講演「継承から革新へ： 国立 M.K. チュルリョーニス美術館 の歩み」

2026年3月28日(土)14:00-15:30

会場：国立西洋美術館 講堂

講師：ヴィルギニヤ・ヴィトキエネ（国立M. K. チュルリョーニス美術館 館長）※英日逐次通訳付き



おとぎ話(王たちのおとぎ話)1909 テンペラ、カンヴァス 70.2 x 75.3 cm

定員：100名(要事前申込・先着順)

参加費：無料

申込期間：2026年3月13日(金) 12:00(正午) ～

開催前日 午前10:00

申込方法等詳細は下記のリンクをご参照ください。

https://www.nmwa.go.jp/jp/experience-learn/detail/event_138.html

この期間外は「申込フォーム」にアクセスできませんのでご注意ください。

定員に達し次第、申込を締め切ります。

東京・春・音楽祭

「チュルリョーニス展 内なる星図」

記念コンサート

ハープの弦にのせて～チュルリョーニス・ピアノ作品集

ヨアナ・ダウニーテ(ハープ)

2026年4月3日(金)11:00-12:00

会場:東京文化会館 大ホールホワイエ

田中正之(国立西洋美術館 館長)による展覧会「チュルリョーニス展 内なる星図」紹介トークがございます。

曲目

ミカロユス・コンスタンティナス・チュルリョーニス (J.ダウニーテ編)

アンジェルス・ドミニVL 184(1901)

マズルカ ロ短調VL 234(1902)

夜想曲 第2番 嬰ハ短調VL 183(1901)

悲歌 ニ短調VL 191(1901)

前奏曲 ヘ長調-イ短調VL 188(1901)

前奏曲 変ニ長調:パストラルVL 187(1901)

前奏曲 変ロ短調:マリア・モラフスカに捧ぐVL 169(1899)

即興曲 嬰ヘ短調VL 181(1900)

子守歌》VL 242(1903)

ヘンルーダの種を蒔いた(民謡編曲)VL 179(1900)

ユーモレスク ト短調VL 162(1899)

前奏曲 ロ長調VL 186(1901)

楽興の時 イ長調VL 246(1903)

出演者

ヨアナ・ダウニーテ(ハープ)

ヨアナ・ダウニーテ博士は、リトアニア音楽演劇アカデミーのハープ演奏科准教授であり、公的機関「Arfos Menas」のディレクターを務めるとともに、ソロ、室内楽、オー

ケストラの分野で高い評価を受ける演奏家です。リトアニアの「ハープ大使」と称される彼女は、ヨーロッパおよびアメリカ各地で演奏活動を行い、表現力豊かで技

術的に精密な解釈によって、ハープのレパートリーを世界各地の著名なコンサートホールに届けてきました。

国立M. K. チュルリョーニス芸術学校を卒業後、海外で研鑽を積み、独自の演奏スタイルと芸術性を確立しました。ジュネーヴではフローレンス・シトルク教授に師事し、アムステルダム音楽院ではエリカ・ヴァールデンプルフ教授のもとで学びました。さらにノルウェー国立音楽院においては、著名なフランス人教授イザベル・ペランの指導のもと、ハープ演奏の修士号を取得した同音楽院史上初のハープ奏者となりました。

2018年から2024年にかけてリトアニア音楽演劇アカデミーで行った博士研究「作曲家と演奏家のコラボレーション：21世紀におけるリトアニア・ハープ・レパートリーの形成」では、とりわけ作曲前の段階における作曲家と演奏家の創造的な相互作用に焦点を当てました。2024年には、リトアニアのハープ奏者として初めて芸術博士号を取得しました。

Fダウニーテは、ヨナス・ユルクーナス、ロレタ・ナルヴィライテ、ヴラダス・シュヴェダス、ジブオクレ・マルティナイティエテ、ギエドレ・パウリュケヴィチウテ、ヴィクトラス・ミニオタス、ルータ・ヴィトカウスカイトといったリトアニアを代表する作曲家たちの作品を数多く初演してきました。また、リトアニア国立交響楽団、カウナス市交響楽団、リトアニア室内管弦楽団などの主要なアンサンブルと共演し、アムステルダムのコンセルトヘボウ、オスロ・フィルハーモニー・ホール、リトアニア国立フィルハーモニーといった世界的に著名な会場で演奏しています。

オーケストラ奏者としての経験は10代から始まり、数十年にわたって、オスロ・フィル

ハーモニー管弦楽団、ベルゲン・フィルハーモニー管弦楽団、オランダ・フィルハーモニー管弦楽団、ノールショピング交響楽団などと共演してきました。さらに、リトアニアおよびノルウェーのオペラ・バレエ劇場でも幅広く活動し、芸術的な多才さを一層広げています。

2022年には、Naxos(ナクソス)レーベルより、ミカロユス・コンスタンティナス・チュルリョーニスの音楽をハープで演奏した史上初の録音《Čiurlionis on Harp Strings》をリリースしました(録音: Baltic Mobile Recordings)。また2024年には、リトアニア音楽情報センターより、彼女が編曲したチュルリョーニス作品のハープ用楽譜集が出版されました。これらのプロジェクトや数多くの初演を通じて、ダウニーテはリトアニアの作曲家を支援し、国際舞台における自国のハープ・レパートリーの拡大に貢献し続けています。

プログラム・ノート

本公演では、ミカロユス・コンスタンティナス・チュルリョーニスの初期ピアノ作品を、ハープのために新たに編曲したオリジナル・アレンジメントを紹介する。

作曲家、画家、そして国民的象徴として広く知られるチュルリョーニスであるが、その音楽は歴史的に、主としてピアノおよび合唱の演奏伝統の中で受け継がれてきた。一方、リトアニアにおけるハープの演奏文化が本格的に発展したのは比較的遅く、その結果、レパートリーには空白が残されていた。

こうした状況のもと、職業的な探究心と文化的使命感の双方に突き動かされ、ハーピ



写真提供：主催者

ストのヨアナ・ダウニーテは、チュルリョーニスのピアノ作品をハープ用に編曲し、録音するという、史上初の試みに取り組んだ。

これらの編曲は、単なる編作にとどまるものではない。チュルリョーニスの詩的なイメージ、感情の強度、そしてリトアニア民謡へ

の言及を、ハープという楽器がもつ固有の表現力によっていかに伝えうるかを探る試みである。ハープは彼の作品に新たな光と奥行きを与え、原曲の精神を尊重しつつ、鮮やかな新しい視点を提示している。

展覧会関連スライドトーク

2026年4月3日(金)17:30-18:00

2026年4月30日(木)11:00-11:30

2026年6月2日(火)10:00-10:30 (手話通訳付き)

解説: 朝倉南(国立西洋美術館研究員)

会場: 国立西洋美術館 講堂

※各回完結(連続講座ではありません、どの回も内容は同じです)

※事前予約不要、先着順(各回110名)

※聴講無料。ただし、当日企画展が観覧できる観覧券が必要です。

※詳細はこちらから:

https://www.nmwa.go.jp/jp/experience-learn/detail/event_140.html

王(レクス)1909 テンペラ、カンヴァス 147.1 x 133.7 cm



演奏会「チュルリョーニスとその同時代人ーフランスの作曲家たち」

出演：ヨアナ・ダウニーテ、上田智子（ハープ）

2026年4月4日(土)13:30開場 14:00開演

会場：静明寺(石川県金沢市材木町28-18)

曲目

ミカロユス・コンスタンティナス・チュルリョーニス(1875-1911)

前奏曲 嬰へ長調 《アンジェルス・ドミニ》
VL 184(ヨアナ・ダウニーテ編／ハープ)

ガブリエル・フォーレ(1845-1924)

即興曲 作品86

アンリエット・ルニエ(1875-1956)

《瞑想》

マルセル・トウルニエ(1879-1951)

演奏会用練習曲《朝に》

M. K. チュルリョーニス

マズルカ ロ短調 VL 234(ヨアナ・ダウニーテ編／ハープ)

カルロス・サルツェード(1885-1961)

《夜の歌》

ロレータ・ナルヴィライテ(1965-)

《沈みゆく海の歌》-二台のハープのために

日本歌曲メドレー

《さくらさくら》《荒城の月》《ふるさと》(上田智子編／ハープ)

プログラム・ノート

本プログラムでは、ナクソス・レーベルより録音・発表された、ミカロユス・コンスタンティナス・チュルリョーニスの初期ピアノ作品のハープ編曲版とともに、アンリエット・ルニエ、ガブリエル・フォーレ、マルセル・トウルニエ、カルロス・サルツェード

といった、彼と同時代のフランスの作曲家たちの作品を取り上げる。

これらの編曲は、チュルリョーニスの詩的遺産を、同時代ヨーロッパの革新的な音楽精神と結びつけることで、ハープのレパートリ



捧げもの 1909 テンペラ、紙 71 x 78.5 cm

ーを大きく拡張する試みである。聴衆は、ハープがもつ豊かな表現の幅を通して、20世紀初頭における歴史的インスピレーションと異文化的創造性が交差する、独自の音響世界を体験することになるだろう。

本公演のハイライトは、金沢を拠点に活動するハーピスト、上田智子との特別共演である。ロレータ・ナルヴィライテによる作品の日本初演に加え、《さくらさくら》《荒城の月》《ふるさと》という親しまれてきた日本歌曲のメドレーを披露し、リトアニアと日本の文化が美しく響き合うひとときを創り出す。

入場料：一般 2,000円、小・中学生 1,000円

チケット取扱：石川県立音楽堂チケットボックス

ス：<https://ongakudo.jp/ticket/>

金沢・リトアニア友好協会

TEL：090-7743-3377

主催：金沢・リトアニア友好協会

共催：駐日リトアニア共和国大使館／リトアニア・

カルチャー・インスティテュート

出演者

※ヨアナ・ダウニーテのプロフィールは17-18ページをご参照ください。

上田智子(ハープ)

石川県金沢市出身。6歳よりアイリッシュ・ハープ、10歳よりグランド・ハープを始める。17歳でハープ協奏曲を演奏し、注目を集める。石川県立金沢辰巳丘高等学校総合学科芸術コース、東京音楽大学器楽専攻(ハープ)を卒業し、同大学大学院(ハープ専攻)修了。

上野・旧東京音楽学校奏楽堂(旧エオリアンホール)での「ハープ新人デビューコンサート」、横浜英国館での「ハープ・ジョイント・リサイタル」などに出演。現在は、ソロ、室内楽、オーケストラなど幅広い分野で全国的に演奏活動を行うほか、協奏曲の演奏、録音、作編曲、後進の指導にも力を注いでいる。

「チュルリョーニス展 内なる星図」 記念コンサート「チュルリョーニス サウン ドスケープを追って」デュオ ブボヴァス 東京・春・音楽祭(東京・上野)

2026年4月16日(木) 2回公演

11:00開演(10:30開場)／14:00開演(13:30開場)

会場：国立西洋美術館 講堂

出演：ピアノ：ロカス・ブボヴァス、ソナタ・デヴェイキテ＝
ズボヴィエネ

曲目：

ミカロユス・コンスタンティナス チュルリョ
ーニス：

チュルリョーニス：

交響詩《森の中で》(ピアノ4手版)

変奏曲《Sefaa Esec》op.15 VL258

前奏曲 イ短調 op.26 VL311

3つの小品 op.19 より ナイチンゲール VL268

交響詩《海》(ピアノ4手版)

「チュルリョーニス:サウンドスケープを追って」
本マルチメディア・レクチャー・コンサート
は、20世紀初頭ヨーロッパ文化における
最も独創的で先見性に富んだ芸術家の
一人、ミカロユス・コンスタンティナス・チュ
ルリョーニスの創造世界を探究するもの
である。ピアノの生演奏に、絵画作品のス
ライド投影、文学テキストの抜粋を組み合
わせ、音・視覚・言葉が不可分に結びつ
いたチュルリョーニス芸術の統一的ヴィジ
ョンを提示する。

三十五歳という短い生涯にもかかわら
ず、チュルリョーニスは驚くほど多彩で豊

かな創作を残した。作曲家としては、二つ
の大規模な交響詩、合唱とオーケストラの
ためのカンタータ《デ・プロフンディス》、室
内楽、無伴奏合唱作品、オルガン作品、ピ
アノ・ソナタ、変奏曲、そして数多くのピ
アノ小品を含む三百曲以上の作品を作曲
した。同時に、画家として約四百点に及ぶ
絵画や素描を制作し、さらに散文や詩に
よる文学作品も遺している。

本プログラムでは、初期のロマン的語法か
ら、きわめて個性的で革新的な成熟期の
様式へと至る、チュルリョーニスの音楽語
法の発展に焦点を当てる。調性的に曖昧
な和声、遠隔調への突然の移行、人工的

旋法、厳格な旋律構造に基づく作曲技法は、彼の音楽の顕著な特徴である。とりわけ複数の変奏曲に見られる旋律列の構造的運用は、20世紀音楽における体系的音列技法の最初期の試みの一つとして位置づけられている。

画家としてのチュルリョーニスは、抽象芸術の先駆者として国際的評価を受けている。象徴的図像を比較的明確に用いた初期作品から、色彩と線のリズムによって構成される複雑な後期作品へと展開し、多くの絵画は《ソナタ》《プレリュード》《フーガ》といった音楽的タイトルを持ち、音楽

的構成原理に基づいて制作されている。

さらに、詩的比喩と哲学的思索に富む文学作品は、音楽や絵画と共通する精神的・宇宙論的主題を扱い、三つの表現領域が一体となった芸術観を完成させている。

《チュルリョーニス：サウンドスケープを追って》では、これら三つの創作領域が五つの主題を軸に統合され、聴衆を音と色彩の交錯する没入的な体験へと導く。ロカス・ズボヴァスおよびソナタ・デヴェイキテ＝ズボヴィエネの演奏と解説によって、単なる演奏会や講義を超えた、総合的な芸術体験としてチュルリョーニスの世界が鮮やかに立ち上がる。

出演者

デュオズボヴァス

ピアニストのソナタ・デヴェイキテ＝ズボヴィエネは、1987年にヴィリニウスの国立M. K. チュルリョーニス芸術学校を卒業し、その後リトアニア音楽演劇アカデミー(LAMT)で研鑽を積んだ。一方、ピアニストのロカス・ズボヴァスは、1973年にカウナスのJ・ナウヤリス音楽ギムナジウムで音楽教育を開始し、1984年に卒業後、LAMTに進学。1989年にピアノ演奏の学士号を取得した。

リトアニアでの学生時代、ソナタは国内コンクールで受賞を重ね、ロカスは1986年のM. K. チュルリョーニス国際ピアノ・コンクールで第1位を獲得し、国際的な評価を確立した。

1990年には、二人そろってアメリカに渡り、デポール大学音楽学部にてドミトリー・パペルノ教授に師事。ロカスはピアノ演奏の修士号を、ソナタは学士号および修士号を取得した。さらに、ゲンリフ・ネイガウス財団、クリーヴランド州立大学音楽学

部、イリノイ州立大学音楽学部のマスタークラスに参加し、芸術性を磨いた。

二人はソロ・リサイタルや室内楽公演で広く演奏活動を行い、ソナタはオーケストラとの共演でも活躍している。フリンナ・アヴェルブーフ・ピアノ・コンクールでの受賞(ソナタ:1992年・第2位、ロカス:1996年・第1位)を契機に、カーネギー・リサイタル・ホールでのデビューを果たした。

2001年にリトアニアへ帰国後も、演奏家として、また文化事業の企画・運営者として精力的に活動を続けている。同年、ヴィリニウス弦楽四重奏団との初の録音『Čiurlionis 125』をリリース。ロカスはその後、ミカロユス・コンスタンティナス・チュルリョーニスのピアノ作品全集を6枚組CDとして録音し、2025年には作曲家生誕150周年を記念して、2枚組アルバム『Four Meditations』を発表した。これらの功績により、ロカスは2011年にリトアニア功労勲章ナイト十字章を授与されている。

ソナタ・デヴェイキテ＝ズボヴィエネとロカス・ズボヴァスは、1997年にシカゴ滞在中に「デュオ・ズボヴァス」としての活動を開始。以降、北米・南米、ヨーロッパ、アジア各地で演奏旅行を行い、ノルウェー、フランス、イタリア、スロヴェニア、ドイツ、フィンランド、ウクライナ、オランダ、リトアニアなどの国際音楽祭に出演してきた。2005年から2019年にかけては、ネリンガにおいて国際音楽・エコロジー・フェスティバル「Land of the Disobedient」を主催した。

デュオ・ズボヴァスは、リトアニアの主要なオーケストラや合唱団と共演し、彼らのために書かれた10作品以上の新作を初演している。レパートリーの中心は、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、ブラームス、ラヴェル、ドビュッシー、ガーシュウィン、ストラヴィンスキーらによるピアノ連弾の原曲および編曲作品、ならびにJ. S. バッハ、メンデルスゾーン、ブルッフによる二台ピアノのための協奏曲である。



写真提供：主催者

入場料:

4,700円(全席自由／展覧会観覧料含む／当日に限り展覧会鑑賞可)

公式ページ: 東京・春・音楽祭「チュルリョーニス展 内なる星図 記念コンサート」

https://www.tokyo-harusai.com/program_info/2026_ciurlionis/

主催: 東京・春・音楽祭実行委員会

共催: 国立西洋美術館

協力・助成: 駐日リトアニア共和国大使館／リトアニア国立フィルハーモニー協会／リトアニア・カルチャー・インスティテュート

協力: 日本音響エンジニアリング株式会社

会場: 国立西洋美術館 講堂

マルチメディア・レクチャー・コンサート 「チュルリョーニス：サウンドスケープを追って」

2026年4月20日(月)18:00開演

会場：桐朋学園音楽大学 音楽学部 調布キャンパス
(調布市調布ヶ丘1丁目10-1)

デュオ ズボヴァス ロカス・ズボヴァス&ソナタ・デヴェイ
キーテ＝ズボヴィエネ(ピアノ)

デュオ・ズボヴァスのプロフィールおよびプログラムの詳細は、23-25ページをご参照ください。



知らせ 1904/1905 パステル、紙 62.2 x 90.7 cm

入場料：無料参加申込：jimukyoku@jfc.gr.jp
主催：日本作曲家協議会／駐日リトアニア共和国

共催：桐朋学園大学音楽学部 大使館／リトアニア・カルチャー・インスティテュート
後援：リトアニア共和国外務省

演奏会「チュルリョーニスー光と無限」 リトアニアと日本の作曲家の作品～

2026年4月22日(水)19:00開演

会場：サントリーホール ブルーローズ(小ホール)

出演：ピアノ：ロカス・ズボヴァス、末永匡、谷口知聡

ミカロユス・コンスタンティナス・チュルリョーニス生誕150周年を記念し、また東京・国立西洋美術館で開催される大回顧展

「チュルリョーニス——内なる星座」に合わせて、日本作曲家協議会は現代日本の作曲家たちに委嘱し、チュルリョーニスの絵画に触発されたピアノ作品の創作を依頼した。本公演では、それら委嘱新作の世界初演に加え、チュルリョーニス自身によるピアノ作品も演奏される。

曲目

田丸彩和子：

琥珀の海 チュルリョーニス 第五ソナタ
アレグロに触発されて(委嘱新作)

鈴木 豊乃：

The Promised Door(委嘱新作)

小坂 咲子：Yard-recitative with silent
butterfly for piano solo(委嘱新作)

古永家健太：《静寂》—チュルリョーニスの
絵画によせて—(委嘱新作)

豊住 竜志：“Serenity” for piano～to the
Painting of M. K. Čiurlionis (委嘱新作)

M.K. チュルリョーニス：

楽興の時 VL163a

プレリュード in b-minor VL182a

マズルカ in a minor VL171

マズルカ in e-minor VL172

プレリュード in G-flat major VL193

Angelus Domini VL184 他

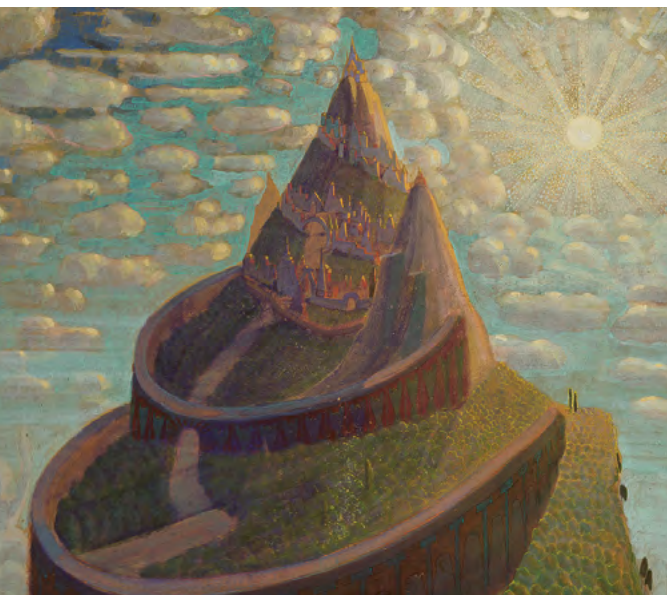
出演者

ロカス・ズボヴァス(ピアノ)

※プロフィールは8ページをご参照ください。

末永 匡(ピアノ)

桐朋学園、ベルリン芸術大学、フライブルク音楽大学、モーツァルテウム音楽大学ザルツブルク校で学ぶ。中島和彦、E・アンドレアス、G・ミシヨリー、D・クラウス、H・ライ



おとぎ話(お城のおとぎ話)1909
テンペラ、厚紙 49.6 x 67.1 cm

グラフの各氏に師事。

ソリストとして、中国、エジプト、ヨーロッパ各地、日本国内のオーケストラと共演。レパートリーはバロックから現代音楽に及び、初演や現代作品の演奏にも積極的に取り組んでいる。音楽は単に「理解される」ものではなく、多様性や自己省察、問いを立てる行為そのものが重要であるという信念のもと、独自の音楽観を築いている。

「音楽は人をつなぐ」という理念のもと、音楽を通じた人間的つながりを育むプロジェクトや、社会・文化的活動にも積極的に関わっている。異なる芸術分野との協働を重視し、表現の可能性を広げ続けている。アルバム『Intermezzo』『Tragico』をリリース。

谷口知聡(ピアノ)

桐朋学園大学音楽学部ピアノ科卒業後、奨学金を得て渡仏。パリ国立高等音楽院にてピアノ科第2課程(ディプロム)を修了し、現在同音楽院にて室内楽第2課程および現代音楽第3課程に在籍。

南仏ラ・ロック＝ダンテロン国際ピアノ音楽祭、イタリア・ヴェネツィア・ビエンナーレ、ドイツ・ハンブルクのマルタ・アルゲリッチ音楽祭など、主要国際音楽祭に招かれ演奏。2023年にはラ・フォル・ジュルネ TOKYOにて東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団と共演した。

2022年、第15回オルレアン国際ピアノコンクール第2位および「アンリ・デュティユー滞在賞(ジュヌヴィエーヴ・ジョワ賞)」を受賞。2020年には第14回現代音楽演奏コンクール〈競楽XIV〉第1位。明治安田クオリティオブライフ文化財団海外音楽研修生(2021・2022年)、ローム ミュージック ファンデーション奨学生(2023・2024年)。

入場料: 一般4,000 円 学生2,000 円

<https://www.gettiis.jp/event/detail/100143/>

J34054

公式ページ: <https://www.jfcomposers.net/concert>
チュルリョーニスー光と無限 /

主催: 一般社団法人日本作曲家協議会

共催: 駐日リトアニア共和国大使館／リトアニア・カルチャー・インスティテュート

後援: 一般社団法人日本音楽作家団体協議会 (FCA)

協力: 桐朋学園大学音楽学部

助成: 公益財団法人ロームミュージックファンデーション

展覧会関連オンライン講演会 「ミカロユス・コンスタンティナス・ チュルリョーニス(1875-1911): 紙上に広がる幻想世界」

2026年5月16日(土) 11:00-12:30

講師: ヴァイヴァ・ラウカイティエネ
(国立M. K. チュルリョーニス美術館学芸員)

※英日同時通訳付き



太陽 1907 パステル、紙 61 x 72 cm

実施方法: Zoomウェビナーにて配信

※事前申込制

※申込方法等詳細はこちらから:

https://www.nmwa.go.jp/jp/experience-learn/detail/event_139.html

現代音楽アンサンブル 《Synaesthesia》特別演奏会 — Čiurlionis. Slowed and Reverb — (日本初演)

2026年6月9日(火)19:00開演

会場:東京カテドラル聖マリア大聖堂
(カトリック関口教会)

出演:《Synaesthesia》(シナエステシス)

《Synaesthesia》は、2013年にリトアニア・ヴィリニウスで結成された現代音楽アンサンブルで、音楽・空間・視覚要素を横断する革新的な表現で国際的に高い評価を受けている。2020年にはドイツのエルンスト・フォン・ジーマンス音楽財団よりエルンスト・フォン・ジーマンス・アンサンブル賞を受賞。リトアニアおよび国際的な現代作曲家の作品を積極的に委嘱・初演し、音楽を多層的な体験へと拡張する活動を続けている。その総合芸術的な姿勢は、音楽と絵画を横断したチュルリョーニスの創作理念とも深く共鳴する。

出演メンバー

アルミナス・ビギース／テナーサクソフォン	マルタ・フィンケルシュタイン／ピアノ
アルトゥーラス・カジメーカス／クラリネット	モニカ・キクナゼ／ヴィオラ
シモナス・カウピニス／チューバ(作品コン セプト提案者)	エヴァアルダス・ペトゥカス／チェロ

曲目解説 Dominykas Digimas:《Čiurlionis. Slowed and Reverb》

本作は、ミカロユス・コンスタンティナス・チュルリョーニスの《前奏曲 ニ短調(VL 239)》を素材とし、その和声構造を保持したまま、音を極度に引き伸ばすことで再

構成した作品である。旋律的な進行はほとんど知覚されない速度へと変容し、個々の音は建築空間の残響と溶け合いながら、静止した時間のなかに漂う。



第五ソナタ(海のソナタ)フィナーレ テンペラ、紙 73.2 x 63 cm

作曲者は、チュルリョーニスの音楽に内在する宗教的・霊的感性に着目し、教会空間そのものを作品の一部として取り込むことを構想した。音響は演奏者のみならず、空間の響きによって完成され、聴き手は音楽を「聴く」というよりも、「空間のなかで体験する」ことになる。

2023年にヴィリニユスの救世主イエス・キリスト教会で初演された本作は、教会建築との高い親和性を示し、深い瞑想性を伴う音響体験として注目を集めた。東京カテドラル聖マリア大聖堂での日本初演は、チュルリョーニスが生涯追い求めた精神性

と総合芸術の理念を、現代音楽として体験する場となるだろう。

演奏時間：約40分(主催者挨拶を含め全体約60分)

入場料：2000円

(任意寄付・事前申込制)

主催：駐日リトアニア共和国大使館／リトアニア・カルチャー・インスティテュート／日本リトアニア友好協会

後援：リトアニア共和国外務省／リトアニア文化評議会



現代音楽アンサンブル 《Synaesthesia》特別演奏会 — Čiurlionis. Slowed and Reverb — (日本初演)

2026年6月13日(土)16:00 開演

会場：東本願寺 能舞台(京都)

東京公演が大聖堂の豊かな残響に身を委ねる体験であるとするれば、京都公演は、音が生まれ、そして消えてゆく「間(ま)」に耳を澄ますひとときとなるであろう。

《Čiurlionis. Slowed and Reverb》は、音を極限まで引き延ばすことで、響きと沈黙の境界を浮かび上がらせる作品である。能舞台という簡素で緊張感のある空間において、音は広がるというよりも、静かに留まり、やがて消えゆくものとして立ち現れる。

同じ作品でありながら、場の違いによって感じ取られる時間や感覚は異なり、その差異に静かに向き合う体験となるであろう。

出演者と曲目になど詳細については東京公演をご参照ください。

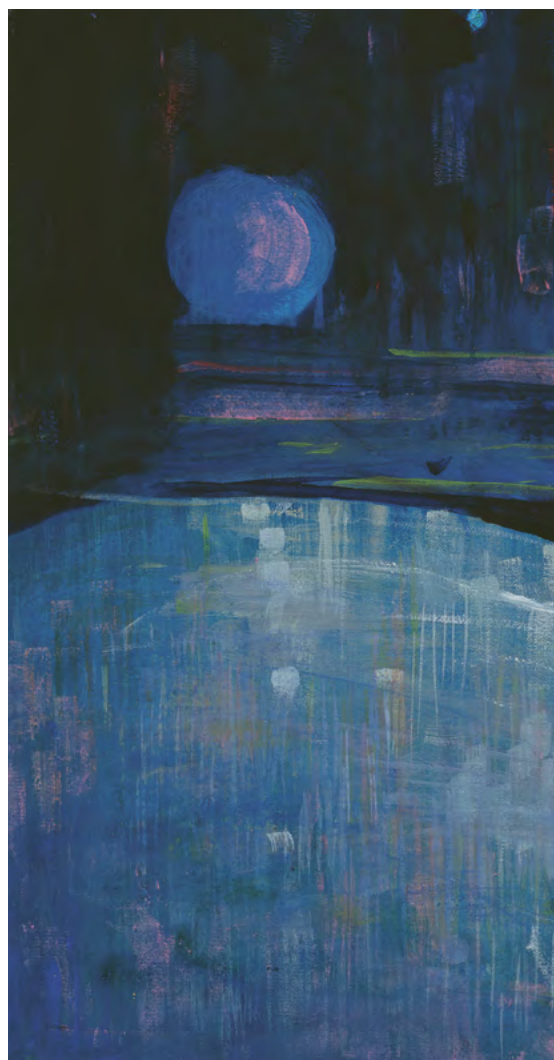
入場料：3000 円、事前申し込み：

主催：日本リトアニア友好協会／

駐日リトアニア共和国大使館／

リトアニア・カルチャー・インスティ
テュート

後援：リトアニア共和国外務省／リトアニア文化
評議会



「天地創造」全13点よりIII, 1905/1906
パステル、紙 61 x 72 cm

日本の団体によるイベント

在本彌生写真展

「水は宙を視ている — チュルリョーニスの仕業 —」

2026年3月20日(金)～5月6日(水)

会場:minä perhonen elävä II

(東京都千代田区東神田1-3-9)

在本彌生:写真家。東京生まれ。アリタリア航空の客室乗務員として勤務する中で写真と出会う。2003年に初個展を開催し、2006年よりフリーランスの写真家として活動を開始。

衣服、食、住空間といった日常生活に根ざした美しさをテーマに、世界各地で取材・撮影を行い、手工芸、料理、テキスタイル、デザイン、旅などを扱う雑誌や書籍で作品を発表している。

2025年には、5度にわたるリトアニアへの旅で撮影した作品とその印象をまとめた写真とエッセイ集『Lithuania! Lithuania! Lithuania!』(アノニマ・スタジオ)を刊行。

そのほかの写真集に、『Magical Transit Days』(2005年、アートビート出版社)、『Beasts of Mine』(2015年、青幻舎)がある。

入場料:無料

主催:minä perhonen

協賛:リトアニア・カルチャー・インスティテュート

協力:アノニマ・スタジオ

展示概要

マリヤの部屋の壁にピンナップされたポストカードに描かれていたのは、リトアニアの芸術家チュルリョーニスの絵画作品だった。「星のソナタ アレグロ」、私の眼は釘付けになった。小さな絵の中に見たことのない広い世界があった。暗さと明るさが共存する色が混ざり合い、反復されるかたちがこだまのように連なっていた。こうしてリトアニアを初めて訪れたその日に、チュルリョーニスの洗礼を受けた。それは幸せなことだったとおもう。確かに森の樹々は優しい巨人のように腕を広げていたし、水面は光を受けてもうひとつの宙を映し出していた。これはチュルリョーニスが見せてくれた世界...いつの日からか、私はそう唱えながらリトアニアを撮るようになっていた。それらの光景は既知と未知の「境界」を軽く飛び越え、新しい情景になって私に問いかけてくる。すべてチュルリョーニスの仕業なのだ。

演奏会

マーラー祝祭オーケストラ

第26回定期演奏会

2026年4月11日(土)12:45開場／13:30開演

会場：ミューザ川崎シンフォニーホール

指揮：井上喜惟

マーラー祝祭オーケストラ

曲目

M.K.チュルリョーニス：交響詩《森の中で》

B.バルトーク：ヴァイオリン協奏曲 第2番（ヴァイオリン独奏：植村 理葉）

A.ツェムリンスキー：大管弦楽のための幻想曲《人魚姫》



天使たち(楽園)1909 テンペラ、厚紙 47 x 61.8cm

演奏会詳細

音楽と絵画が交わる場所へ——

チュルリョーニス生誕150年・没後115年を記念して、国立西洋美術館「チュルリョーニス展」とのタイアップ・プログラム。

象徴主義の画家であり作曲家でもあった彼の交響詩《森の中で》を皮切りに、バルトーク《ヴァイオリン協奏曲第2番》（独奏：植村理葉）、ツェムリンスキー《人魚姫》が響き合う。

20世紀初頭——絵画も音楽も“新しい世界”を求めている時代。

井上喜惟指揮・マーラー祝祭オーケストラが、その芸術的交差点を壮大なスケールで描き出す。

交響詩《森の中で》

交響詩《森の中で》は、チュルリョーニスが1900年から1901年にかけて作曲し、1901年に完成させた最初の本格的な管弦楽作品である。友人エヴゲニウシュ・モラフスキに献呈され、ザモイスキ伯爵基金による作曲コンクールに参加して審査員から特別表彰を受けた。

自然を題材とする標題音楽でありながら、本作の関心は単なる情景描写にとどまらない。緩やかな序奏に始まり、動機の反復と変容、声部の重層化によって音響が段階的に積み重ねられ、森の奥行きや静謐さを思わせる空間的広がり が形づくられていく。旋律と和声は有機的に展開し、音楽的時間そのものが一つの空間として組織化されている点に、本作の特色がある。

ロマン派後期の管弦楽語法を基盤として、音響によって空間を構築しようとする

発想には、後年の象徴主義的な創作へとつながる思考の萌芽がすでに認められる。《森の中で》は、この時期のチュルリョーニスの創作を代表する作品であり、その後の交響的構想の出発点となった。

マーラー祝祭オーケストラ

マーラー祝祭オーケストラは、2001年に井上喜惟を音楽監督として設立されたオーケストラである。マーラー作品を中心に、ブルックナーをはじめとする近代・現代作品にも取り組み、作品理解と表現の深化を追求している。

これまでに行ってきた演奏会は、国内外のホールにおいて高い評価を受け、多くの聴衆に深い感動を与えてきた。指揮者やソリストとの共演を通じて、オーケストラとしての表現力を継続的に磨き続けている。

音楽監督・指揮者：井上喜惟

1979年、中学卒業と同時に渡欧。ウィーンでピアノを名教師ブルーノ・ザイドルホフアーおよびチェコ出身のピアニスト、ブランコ・チュベルカに師事。その後、指揮をオーストリア共和国音楽総監督クルト・ヴェスに師事。1982年よりミュンヘン、マインツでセルジュ・チェリビダッケに、バイロイト音楽祭でホルスト・シュタインに師事。1986年よりケルン放送交響楽団他で、マーラー演奏の大家ガリー・ベルティーニのもと、さらに研鑽を積む。同時にレナード・バーンスタインにも師事。ブラジルの名匠イサーク・カラブチェフスキーおよび小澤征爾のアシスタントを務めたこともある。

1992年、チェコ国立ブルノ・フィルハーモニ



第六ソナタ(星のソナタ)アレグロ 1908 テンペラ、紙 72.2 x 61.4 cm

ー管弦楽団定期演奏会で正式デビュー。同オーケストラとチャイコフスキー交響曲第5番を録音、CDデビュー。以後、チェコ、ポーランド、旧ソ連などを中心に活躍し、ワルシャワ・フィルハーモニー管弦楽団やチェコナショナル交響楽団との録音・演奏も行う。ラフマニノフ録音は高い評価を得ている。

ウィーンでアルメニアの作曲家、指揮者ロリス・チェクナヴォリアンと出会い、1993年よりアルメニア・フィルハーモニー管弦楽団を指揮。2000年4月には楽器を一新し、井上自身のプロデュースによる「日本音楽

週間」をアルメニア・エレヴァンで実現。

2001年よりマーラー作品全曲演奏を目的にジャパン・グスタフ・マーラー・オーケストラを設立。2003年にはジャパン・シンフォニアを創設。国内外で高い評価を得る。2012年よりモンゴル国立音楽舞踏大学客員教授、同年10月には日本・モンゴル修好40周年記念演奏会を指揮。2013年よりモンゴル国立フィル常任客演指揮者、2016年よりアルメニア国立フィル客演指揮者に復帰。

公式ページ：

<https://www.mahlerfestivalorchestra.com/>

主催：マーラー祝祭オーケストラ

入場料：3,000円(全席指定)

チケットは下記サイトよりご購入いただけます。

VR体験イベント「天使の軌跡」 〔金沢ナイトミュージアム参加企画〕

2026年8月14日(金)／15日(土)／16日(日)

2026年8月21日(金)／22日(土)／23日(日)

2026年8月28日(金)／29日(土)／30日(日)

各回：11:00、12:00、13:00、14:00、15:00、16:00、
17:00、18:00、19:00、20:00

場所：ギャラリー ノエチカ
(石川県金沢市下本多町6-40-1)

「天使の軌跡」

～時を超えた想像の空間へ～

「天使の軌跡」は、象徴主義、音楽、初期の抽象主義を融合させた有名なアーティスト、作曲家、先見の明のあるチュルリョーニスの魅惑的な作品を通して、人間の存在、世界の本質、存在の本質という深遠なテーマを掘り下げる、並外れた体験であり、変革的な仮想現実の旅です。

ヴェネツィア映画祭でデビューし、権威あるルーメン賞(芸術と技術)を受賞した「天使の軌跡」は、芸術、音楽、感情的なストーリーテリングを独自に組み合わせ、没入感のある体験を生み出します。

反省、探求、感情の共鳴を誘うこのユニークなVRの旅にご参加ください。彼の魅惑的な作品を通して忘れられない旅に乗り出し、感情と美しさに共鳴する魅惑的なバーチャルリアリティ体験で、彼の芸術的ビジョンの奥深さを探求してください。革命的

な方法で芸術と関わるチャンスをお見逃しなく。アートとバーチャルリアリティが出会う「天使の道」をぜひご体験ください。

入場料：一般 3,000円／高校生以下 2,000円

主催：金沢とリトアニアをつなぐ会

協力：金沢アーツカウンシル／ノエチカ

鑑賞の流れ：11:00 受付 → 11:15 VRスタート →
32分間上映 → 11:45 VR終了

展示内容：

- ・チュルリョーニス紹介動画(プロジェクター上映)3分
- ・チュルリョーニス複製画
- ・チュルリョーニス書籍展示
- ・リトアニアの紹介パネル



